

# ホモ・サピエンスの拡散・定着期における文化動態 —南ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡調査(2018年)—

門脇 誠二 名古屋大学博物館講師  
 ドナルド・ヘンリー タルサ大学人類学科名誉教授  
 サタ・マサデ ヨルダン考古学研究所  
 廣瀬 允人 名古屋大学環境学研究科博士課程

## Cultural Dynamism during the Geographic Expansion of *Homo sapiens*: The 2018 Season of the Palaeolithic Investigation in the Jebel Qalkha, Southern Jordan

KADOWAKI, Seiji Lecturer, Nagoya University Museum, Nagoya University  
 HENRY, Donald Professor Emeritus, Department of Anthropology, The University of Tulsa  
 MASSADEH, Sate Researcher, Department of Antiquities of Jordan  
 HIROSE, Masato Doctoral student, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

### 1. はじめに

私たちホモ・サピエンス(新人)はアフリカで20万~30万年前に出現し、その後分布範囲をユーラシアに広げていった。この分布拡大の出発点が西アジアである。それを示す新たな証拠が2018年に相次いで発表された。イスラエルのミスリヤ洞窟におけるユーラシア最古(19万年前)の新人化石と、サウジアラビアのアル-ウスタ遺跡における8万5千年前の新人化石である。これらの記録は、新人がアフリカから拡散し始めた初期の様子を示すが、新人の「定着」には至らない。当時のユーラシアにはネアンデルタール人やデニソワ人などの旧人がいて、彼らもまた分布拡大したからである。西アジアのレヴァント地方では、ホモ・サピエンスが一度拡散したにもかかわらず、その後、ネアンデルタール人がヨーロッパから侵入してきたことが分かっている。この段階は中部旧石器時代に相当する。

「ホモ・サピエンスの定着」とここで呼ぶのは、旧人が消滅して新人が人口を急激に増やし始めた現象である。この段階が上部旧石器時代の初期から前期に相当する。このように、新人と旧人の人口動態と時代区分が対応するのは、時代区分の定義となる考古記録(当時の人々の行動や文化の痕跡)が変化したからである。旧人と新人が一部共存し、両者のあいだで類似した行動や文化が認められる時代(中部旧石器時代)から、新人のみが増加し新人特有の行動や文化が生じた時代

(上部旧石器時代)への変化はいつ、どのように、なぜ進行したのか? この問題は旧人や原人が分布したユーラシア各地における大きな研究テーマとなっているが、人骨と遺跡の記録が豊富な西アジアはこの研究が最も進んだ地域の1つである。

この課題に関わるオリジナルの標本を得るために、レヴァントにおける旧石器時代遺跡の調査を2016年に開始し、本報告会でも発表を行ってきた(門脇ほか2017, 2018)。本稿では2018年に行った第3次調査について紹介する。

### 2. ヨルダン南部における 旧石器遺跡群の調査

西アジアの中でもレヴァント地方は、南から新人が拡散し北からはネアンデルタール人が拡散してきて両者が一時共存した可能性が指摘されている。ネアンデルタール人は気候寒冷化を起因としてヨーロッパから南下してきたと考えられ、新人は北アフリカやアラビア半島の乾燥化を起因として地中海沿岸域のレフウジアに避難してきたと考えられる。発表者が調査を行っているのはヨルダン南部で死海地溝帯の東岸であるが(図1)、この地域はアラビア半島北部と東地中海沿岸域のあいだに位置する。ドナルド・ヘンリーによる1976年~1999年の調査により、ネアンデルタール人によって残されたと考えられる中部旧石器時代の遺跡から、その後の新人の侵入・定着の時期に相当する上部旧石器時代の遺跡が発見された。この中でも、カル

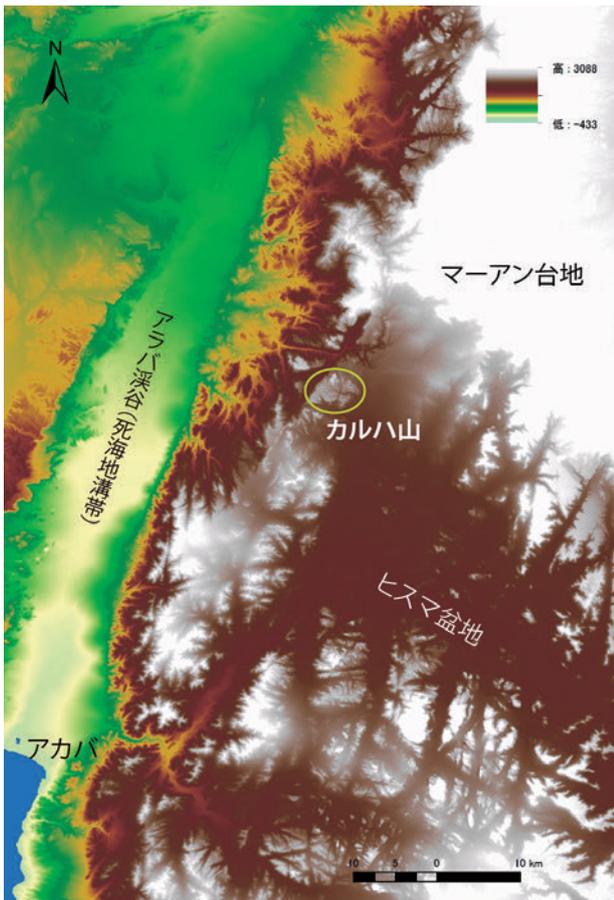


図1 南ヨルダンの地形図(カルハ山の位置を示す)

ハ山域には10遺跡ほどが集中しており、その幾つかの遺跡の再調査を2016年から行っている。

2018年は、トール・ハマル遺跡(上部旧石器時代～終末期旧石器時代)とワディ・アガル遺跡(上部旧石器時代)で発掘調査を行い、トール・ファワズ遺跡(上部旧石器時代)とトール・ファラジ遺跡(中部旧石器時代)では堆積物のサンプリングを行った(2018年6月4日～24日)。また、カルハ山から南方の遺跡踏査を行うと共に、文化人類学者(国立民族学博物館の池谷和信教授)の協力を得て、遺跡周辺の水場と鳥獣に関する民族調査を行った。

### 3. トール・ハマル岩陰の発掘

カルハ山の遺跡群の中でも最も厚い堆積を有する(図2)。これまでに2mの堆積が確認されており、さらに下に続く可能性がある。しかし、最下部はとてもしまりのつよい堆積のため発掘がストップしている。今年度は、これまでの発掘区を拡張し、新たに1m×1mの発掘区(Unit 11)を地表から2m下まで発掘した。

その結果、地表下1m弱までの堆積(A層～E1層



図2 トール・ハマル岩陰での発掘調査

に対応)からは、ムシャビアンという文化に属する遺物を回収した。ムシャビアンは1万5千年頃の終末期旧石器時代で、たくさんの細石器(特に湾曲した背付き細石器)が特徴である。石器以外には、ガゼルやヤギなどの動物骨も出土した。また、マツムシ類やツノガイ類のたくさんの海産貝殻もみつかった(千葉県立中央博物館の黒住耐二氏による同定)。巻貝の多くには孔が空いており、ツノガイも元々管状であるため、ビーズとして用いられたと思われる(図3)。カルハ山一帯は紅海から55km離れているため、この距離を越えてわざわざ運ばれてきたはずである。

ムシャビアン文化より下のF層～H層からは、上部旧石器時代の遺物がみつかった。小石刃と呼ばれる幅12mm未満の細長い石器素材が特徴であり、前期アハマリアンという文化に相当する。動物骨や貝殻の出土量は少ない。

### 4. ワディ・アガル遺跡の発掘

カルハ山の東端に位置し、ヒスマ盆地を見渡せる場所に位置する遺跡である(図4)。岩陰部分が現在は崩落してしまっている。大きな崩落岩と岩壁のあいだの



図3 海産貝殻のビーズ(トール・ハマル岩陰出土)



図4 ワディ・アガル遺跡での調査風景 (ヒスマ盆地を見下ろす)



図5 上部旧石器時代初期の石器(ワディ・アガル遺跡出土)

2m~3mの隙間に発掘区を設けている。今年は1.5m<sup>2</sup>ほどの面積を発掘した。堆積は薄く、地表下1m弱でしまりの強い堆積が露出し発掘を止めている。

アメリカ隊による1980年代の調査では地表下40cm程のしまりの強い堆積(C層)で発掘が止められていたが、再調査ではその堆積を除去し、その下のD層を発掘した(厚さ20cm~30cm)。D層の上部(D1層)はしまりの弱い褐色砂層で、遺物の密度が高くなることが分かった。D層下部(D2層)は次第にしまりが強くなり遺物密度も減少する。

この遺跡から見つかる石器は、上部旧石器時代初期という時期に属する(図5)。この時期は、ネアンデルタール人が消滅した頃で、ホモ・サピエンスが定着した初頭に相当すると考えられている。こうした人類の

進化に関わる要因として、当時のホモ・サピエンスの行動や文化がネアンデルタール人と違ったのかどうか、という点を直接調べられる記録がワディ・アガル遺跡から得られることが期待される。

## 5. カルハ山南方の遺跡踏査

カルハ山の南部にも岩陰らしい地形が衛星画像で認められたため、踏査を行った。1km×3kmほどの範囲に分布する岩陰を訪れ、遺跡が残されているかどうかを確認した。その結果、2ヶ所で旧石器時代の遺物が散布していた(図6)。中部旧石器時代~終末期旧石器時代の石器が見つかったが、いずれの場所も堆積が薄かった。浸食によって流されてしまったか、あるいは堆積しにくい環境だったと思われる。



図6 カルハ山南方で新たに発見された岩陰遺跡



図8 イワシャコなどの鳥を捕まえる罠  
(トール・ハマル岩陰近郊)

## 6. 民族考古学の調査

国立民族学博物館の池谷和信教授の協力により、トール・ハマル遺跡周辺における水場と鳥猟の民族調査を行った。調査地は内陸乾燥地帯に位置し、現在は年間降水量が50 mm未満である。旧石器時代の降水量は多かったことが分かっているが、それにしてもこの地域では水の確保が大きな課題だったはずである。調査の結果、遺跡から300 m～500 m離れた場所に、幾つかの水場があることが確認された(図7)。これらは自然にできた岩盤の窪みで、雨水がたまっている。2か月前に降った雨水がまだ残っていた。この地域では、ナバテア時代に構築されたダムや貯水池が有名であるが、雨水が自然にたまりやすい地形が多かったと考えられる。

鳥猟は、罠を谷底にしかける方法で行われている。地面に幅10 cm弱の浅い穴を幾つか掘り、その上に板石を斜めにして小枝で支える(図8)。支えの下にはもう1本の小枝を横にしてはさむ。穴底においた餌に寄せられた鳥が横枝をけとばすと、支えがとれて板石



図7 砂岩の窪みにできた水場(トール・ハマル岩陰近郊)

が倒れ、鳥が穴の中に閉じ込められるしくみである。これによって捕まえられる鳥としてイワシャコが確認されているが、この鳥の骨はトール・ハマル遺跡から出土しており上部旧石器時代にも利用されていた。当時でも十分に可能だった技術で現在も猟が行われているのが興味深い。

## 7. まとめ

調査で得られた資料を用いて、石器や動物骨の形態分析の他に、年代測定や古気候復元、同位体分析などの専門家との共同研究も進めている。来年度以降も調査を継続する予定である。本年度の調査は、著者以外に下記の参加者の協力を得た。池谷和信(国立民族学博物館)、西本昌司(名古屋科学館)、内藤裕一(名古屋大学)、山内良祐(名古屋大学)、木田梨沙子(名古屋大学)(敬称略)。この調査は、文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020(領域番号1802)「パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」(代表：西秋良宏、東京大学)の一環として進められており、同プロジェクトの研究大会や報告書などにおいて研究成果の進捗状況が随時公表されている。詳細は、プロジェクトウェブを参照(<http://paleoasia.jp/>)。

## ■参考文献

- ・ Belmaker, M., H. Bocherens, Y. Naito, H. D. O'Brien, C. Wissing, T. Tamura, S. Kadowaki (2019) Paleoenvironmental studies Tor Hamar, southern Jordan: Early modern human behavioral adaptability during MIS 3. *The 88<sup>th</sup> Annual Meeting of the American Association of Physical Anthropologists*, Cleveland, Ohio, March 27-30, 2019.
- ・ Kadowaki, S. and D. O. Henry (2019) Renewed investigation of the Middle and Upper Paleolithic sites in the Jebel Qalkha Area, southern Jordan. In: S. Nakamura, T. Adachi, M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, 23-41. Rokuichi Syobou, Japan.
- ・ Naito, Y. I., M. Belmaker, H. Bocherens, C. Wissing, and S. Kadowaki (2018) Gazelle hunting activities around Tor Hamar rock-shelter in Jordan viewed from carbon and oxygen isotopic compositions of tooth enamel. *Isoeco2018*, Viña del Mar, Chile, July 30-August 3, 2018.
- ・ 門脇誠二・D. ヘンリー・S. マサデ・廣瀬允人 2017「ホモ・サピエンスの拡散・定着期における文化動態—南ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡調査(2016年)—」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』22-27頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 門脇誠二・D. ヘンリー・S. マサデ・廣瀬允人 2018「ホモ・サピエンスの拡散・定着期における文化動態—南ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡調査(2017年)—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』39-43頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 門脇誠二 2018「西アジアにおける新人の拡散・定着期の行動研究：南ヨルダンの遺跡調査(2017年度)」門脇誠二(編)『ホモ・サピエンスのアジア定着期における行動様式の解明2—パレオアジア文化史学 A02 班 2017 年度研究報告』1-5 頁 名古屋大学。http://paleoasia.jp/wp-content/uploads/2018/04/A02\_2017.pdf
- ・ 門脇誠二 2018「博物館における考古学の学際研究」『考古学ジャーナル』720号 19-22頁。
- ・ 門脇誠二 2018「ホモ・サピエンスの分布拡大と文化進化」第34回国際生物学賞記念講演会。名古屋大学、2018年11月22日。
- ・ 田村亨・門脇誠二・西秋良宏 2018「ヨルダン南部 Jebel Qalkha およびアゼルバイジャン Damjili 遺跡の OSL 年代測定(速報)」北川浩之(編)『アジアにおけるホモ・サピエンス定着期の気候変動と居住環境の解明—「パレオアジア文化史学」計画研究 A03 平成 29 年度研究報告書』35-43 頁。http://paleoasia.jp/wp-content/uploads/2018/04/0e94b3d6028303cc5bb2c0d3000a43f5.pdf
- ・ 長谷川精・門脇誠二・田村亨 2018「南ヨルダンの中部・上部・終末期旧石器時代遺跡堆積物からの古環境復元の試み(速報)」北川浩之(編)『アジアにおけるホモ・サピエンス定着期の気候変動と居住環境の解明—「パレオアジア文化史学」計画研究 A03 平成 29 年度研究報告書』29-34 頁。http://paleoasia.jp/wp-content/uploads/2018/04/0e94b3d6028303cc5bb2c0d3000a43f5.pdf